



第百五十八號

(第十四卷)

昭和九年六月

編輯室より

毎年々々、六月十日には我が國特有の「時の記念日」が巡ってくる。此の時、全國で「時」の重要さが叫ばれ、「時」の守ることの約束が繰り返され、又、「時」に忠實な人が表彰される——天文人から見て、意味なしとはしない。

時について、今日、全國の人々に考へて頂かねばならないことが二つ三つある。其の第一は「24時制」の問題である。一日の「午前」「午後」を廢して、只、0時から23時59分59秒まで、ブツ續けに呼ばうといふのである。此の事は1884年頃から世界の有識者たちの間に叫ばれ、既にヨーロッパ大陸の多くの國々では實行してゐるのである。只、英國と米國だけが、例の頑固な保守思想から、(メートル法の問題と同じやうに)、此の改正に反對して、いつも々々々「午前何時」「午後何時」と呼んでゐるのであるが、我が日本も、やはり、此の御つき合ひをしてゐる次第である。——ところが、1932年頃から、頑迷な英國の社會にも「午前」「午後」を廢して、24時制を採用しやうといふ聲が強く聞え始め、新聞や雑誌を賑はしてゐるが、交通、通信、學術等の各方面は、殆んど、すべてが此の改正に賛成であり、天文界の輿論も定まり、いよ々々 B. B. C. (大英放送協會)でも去る四月22日から毎日のプログラムを此の24時制によつて實行するに至つた。こうして、大英全國が完全に時刻制を改めるのも遠くはあるまいと思はれる。英國が實行すれば、米國が之れに習ふのは勿論である。して見ると、我が日本が「午前」「午だけ後」などと、最後まで置きざりにされるのか!

第二の問題は「夏期時刻」である。大戰以來、歐米各國(決して全部ではない)で、夏の半年だけ、時計の針を1時間だけ進めた「夏期時刻」を採用してゐる。理由は主として日常生活を経済的に整理するにあるが、之れがために時制が頗る複雑になり、交通や通信や學術界は多く之れに反對してゐる。——我が國でも之れを見習ふと主張し、多少の叫びをあげてゐる。之れについて吾人の態度は既に定つてゐる(天界第145號)が、しかし、尙ほ會員諸氏の御研究を願ひ、民衆を正論に導かれるやう、御奮勵を願ふ次第である。